

海を越えた日本語の履歴（1）

早 川 勇

要 旨

本稿で取り扱うのは言語接触の問題である。具体的には、日本語語源の語彙で英語に借用された語の歴史を概観する。筆者は2003年末に『英語のなかの日本語語彙—英語と日本文化の出会い—』という本を愛知大学の出版助成を得て出版した。特に英語文献における日本語語彙の初出年調査を行った。初出年書き換えによって日英（日欧）の言語文化交流の歴史も同時に書き換えることができたとは信じている。この研究の過程で、日本語語彙の数奇な歴史に触れることができた。また、このような研究をするのでなければ会うことのなかったような日本語や日本（文化）にも触れることができた。それらの語彙を取り上げ、その語の歴史を2回に分けて語りたい。今回取り上げる日本語はbeddo, cha, Edzo, Godzilla, Hachiya, jinrikisha, jujutsu, kago, kaizen, kaki, kanban, koan, kuruma, mondo, Nintendo, nunchaku, Ryukyu, shokku, Zenなどである。

キーワード：英語に入った日本語，外来語，借用語，初出年

この10年余り辞書学のかたわら私が進めている研究の1つは言語接触の問題である。具体的には外来語・借用語の問題である。特に、日本語語源の語彙で英語に借用された語の歴史的研究を行っている。その基礎調査がほぼ完了し、『英語のなかの日本語語彙—英語と

『日本文化の出会い―』(2003) という本を愛知大学の出版助成を得て出版することができた。

そのなかで特に英語文献における日本語語彙の初出年調査を行った。その結果、*The Oxford English Dictionary* (2nd ed. *OED*と略す) に収録される日本語語彙の約3分の1について、その初出年を早めることができた。時代的に隔たりの大きいものを示すと、banzai (1893→1670), bekko (1889→1795), daimio (1839→1727), dashi (ダシ汁 1963→1830), futon (1876→1795), hatamoto (1871→1727), hiragana (1822→1727), joro (1884→1795), kabuki (1899→1616), kago (1857→1727), kanban (1977→1727), katsura (1894→1795), koku (1727→1615), kotatsu (1876→1615), matsu (1727→1616), nakodo (1890→1795), Nippon (1727→1615), rin (厘 1875→1618) などである。

この研究の過程で、日本語語彙の数奇な歴史に触れることができた。また、このような研究をするのでなければ出会うことのなかったような日本語や日本(文化)にも触れることができた。それらの語彙を取り上げ、その語の歴史を2回に分けて語りたい。

1. 英語のなかの沖縄と蝦夷

初出年書き換えによって日英(日欧)の言語文化交流の歴史も同時に書き換えることができる。例えば、*OED*においてRyukyuの初出年は1808年で、Ryukyuanの初出年は1958年であるが、私の調査によって初出年は早まりそれぞれ1588年と1727年になった。ヨーロッパでは16世紀末に「琉球」の存在は知られていたことになる。その頃はいろいろな綴りがあった。以下()内に初出年を示す。Lechios (1588), Lukess, Lukeesse, Leques (1614), Liquea, Liqueas (1615), Lequois (1663), Riuku, Liquejo, Riuke Islands, Liuke Islands (1727), Luukuv Sangodu (1795) などである。また、Ryukyuanが登場するのはケンペル以降である。Liquejans (1727), Loo-chooan (1818), Loo-Chooan, Loo-Choans (1855), Lew Chewans (1856) などはこちらも多様な綴りがみられる。語頭の文字はLで綴られるのが一般的であった。Rに確定するのはずっと後のことである。

Ryukyuがかなり早い時期から英語文献に登場するのは、琉球の歴史が古いからである。北は奄美諸島から南は八重山列島までの琉球諸島には約3万2千年前から人類が住んでいたという。12世紀頃から一定の政治勢力が現れ、各地に豪族が生まれた。やがて統括され、尚王家を頂点とする琉球王国が成立する。慶長の役(1609年)で琉球は薩摩の支配下に置かれたが、琉球王国は中国をはじめ周辺諸国と積極的に交易を行っていたので、17-18世紀のヨーロッパには知られていた。それ以降、450年間(1429-1879)王国は存続したが、

海を越えた日本語の履歴 (1)

明治維新によって事実上王国は滅亡した。

琉球と英米国との関係を簡単に述べたい。古くは、ウィリアム・アダムズ (William Adams) の乗った東インド会社の船が航海の途中に那覇港に寄港している。また、1797年には探検中の英艦プロビデンス号が宮古島沖に座礁、島民の救助を受けた。1816年には英国船アルセスト号とライラ号 (Lyra) が那覇に来航し40日間滞在した。医師マクレオド (John M'Leod) は1817年に『アルセスト号朝鮮大琉球島公開探検記』(*Narrative of a Voyage, in His Majesty's Late Ship Alceste, to the Yellow Sea, along the Coast of Corea . . . to the Island of Lewche, etc.*) を著し、翌年には船長バシル・ホール (Basil Hall) が『朝鮮西部沿岸及び大琉球島航海探検記』(*Accounts of a Voyage of Discovery to the West Coast of Corea and the Great Loo-choo Island*) を上梓した。後者はこの頃の琉球について詳しく述べた大著である。

私はその大著をイギリス留学中、エクセター大聖堂の近くにある市の特別閲覧室でみる機会を得た。この本には附録がついている。英語・日本語・琉球語の語彙集である。語彙項目は400余りで多くない。国語学の分野では『クリフォード琉球語彙』(勉誠社文庫71)として知られている。面白い例を挙げたい。Copper - Akaganni - Acooganee. Kiss, to - Umakutji suru - Coochee spootee. Match (fire-stick) - Skedakki, skegi - Kaw. Nostrils - Fanna nosu - Honnakee. Smoke tobacco, to - Tabaco, nomu - Tobacco, footchoong. クリフォード (H. J. Clifford) はツンベルグ (C. P. Thunberg) の日本航海記の英訳版からこれらの語を採取したと断っている。採取した語はほんの一部にすぎない。私はクリフォードの語彙表とツンベルグの英語版の比較点検を行った。該当の語は基本的に同じであるが、多少綴りの異なるものもある。このツンベルグの語彙集には多くの長崎方言がみられるが、クリフォードにもその影響はみられる。

バシル・ホールの外孫にあたるのがチェンバレン (Basil Hall Chamberlain) である。チェンバレンは1886年から90年まで東京大学で講義をし、日本に近代言語学を確立した。彼は1893年に沖縄に滞在して言語民俗調査を行い、「琉球語文典並びに辞典に関する試案」(*Essay in Aid of a Grammar and Dictionary of the Luchuan Language* 1895) を Asiatic Society of Japan の紀要に出した。彼は琉球語を日本語の姉妹語であると考えた。また『琉球—その島と人々』(1895) と題する本も書いた。

さらに、1853年5月にはアメリカ海軍提督ペリー (Matthew C. Perry) が那覇に来航し、同年7月には那覇で琉米修好条約が結ばれた。そして、明治以降の廃藩置県によって沖縄が生まれる。同時に Okinawa, Okinawan が英語に入る。私の調査では Okinawa の初出年は1890年で、Okinawan は1944年である。これと関連し Okie という略語が存在する。一部の辞書に収録されているが、一般的に用いられているということではない。しかし、沖

繩に駐留する米兵は今でも使っている。このOkieはアメリカでは違った意味で理解されるのがふつうである。*Merriam-Webster's Collegiate Dictionary* (11th ed. 以下WC11と略す)には‘a migrant agricultural worker; esp. one from Oklahoma in the 1930s’とある。オクラホマからできたこちらも略語で差別的意味が含まれる。

沖繩語として英語に入っている語にhabuがある。ハブは猛毒をもつ蛇であるが、明治時代には毒を消す血清がなかった。このため、ハブ退治としてマングースが導入された。しかし、結果は悲惨なものとなった。マングースは肝心のハブは食べず、鶏やアヒルを襲い、そして貴重な生き物ヤンバルクイナの生息地まで範囲を広げていった。自然との共生は難しい。

沖繩語としてはほかにもnunchaku, tonfa, saiが英語に借用されている。これらはすべて琉球古武術の道具である。ヌンチャクは革紐などでつないだ2本の堅い棒で護身用の道具である。トンファーも両手二本一組で使う。約45cmの木の棒に握りをつけた武器で、刀を持った敵と戦うために考案された。釵は十手のような形をしたもので、それぞれの手に持ち相手の突きなどを防ぐ武具である。『ヌンチャク・トンファー・釵』という本もあるので、この3つが中心的道具なのであろう。

南から一気に北へ飛ぶ。北海道はかつて蝦夷と呼ばれた。しかし、この蝦夷が西洋の世界で認識されたのは決して早いことではない。16世紀から17世紀にかけての古地図を見るがよい。沖繩は描かれていても、蝦夷の姿はない。存在自体は知られていたようであるが、彼らの認識の枠内に入っていなかった。

古代蝦夷(えみし)については、蝦夷アイヌ説と蝦夷辺民説(蝦夷日本人説)がある。蝦夷アイヌ説では、古代の蝦夷はアイヌにほかならないと考える。これに対して、蝦夷辺民説では古代の蝦夷は文化的にも人種的にも辺境に住む日本人であってアイヌとは直接の関係をもたないと説く。

明治期の英語文献にはE(d)zo, Ye(d)zoという土地に住む人としてAinuという表現だけでなくAinoという表現も頻出する。Ainuとは神に対する「人間」、女に対する「男」を表わす。Ainoはアイヌ語特有の口を丸めた[u]音が日本人には[o]に聞こえたものようである。

先に述べたチェンバレンは、沖繩だけでなく蝦夷地のアイヌにも強い関心を示し、『アイヌ研究より見たる日本の言語神話及地名』(*The Language, Mythology, and Geographical Nomenclature of Japan viewed in the light of Aino Studies* 1887)という著作を書いた。同時に、『アイヌのおとぎ話』(*Aino Fairy Tales* 1888)という57頁の本をロンドンで自費出版した。

蝦夷から北海道にかわる。それと関連して1900年頃の英語文献によく出てくるのはKaitakushiである。北海道の行政および開拓を司った官庁を指す。1869年(明治2年)に創

設され1882年には廃止された。この頃活躍したのがアイヌの父と呼ばれたバッチェラー (John Batchelor) である。彼は英国聖公会宣教師として日本を訪れ、布教活動をするかわらアイヌ民族の理解に努めた。キリスト教の自由、博愛、平等の精神を基礎として、バッチェラーはアイヌ民族のための学校教育を確立した。これはアイヌ民族が和人に屈することなく自らの存在や権利を主張しようとするのに大きく貢献した。1940年 (昭和15年) 日本を離れた。

2. 人力車とリキショー

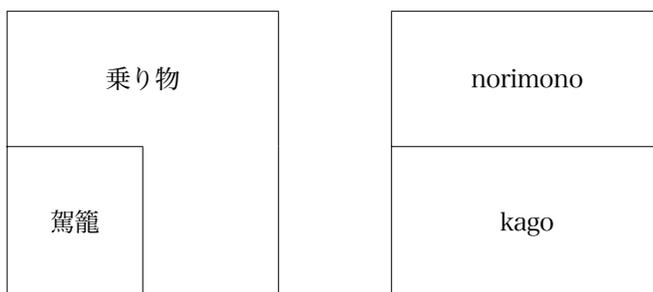
英語のアルファベットでは表記にくい日本語もある。「柔術」に多くの綴りがあることはこの点をよく物語っている。jū-jutsz (1867), jiu-jitsu (1875), jiujutsu (1895), Jūjutsu, Jū-jutsu (1902), jujutsu (1905), jujitsu (1905), jūjutsu (1920), jujutsu (1940) などの綴りがある。同じくらい複雑な綴りの語がある。「人力車」である。Jinriksha (1874), gin-rick-sha (1875), jinriksha, jin-riki-sha (1876), jinrikisha (1878), Jinrikisha (1879), Jin-ri-ki-sha (1880), jin-ricsha (1888), jin-rikisha (1889), jinriki (1920) などの表記がある。これらは長いので、頭のjinが落ちてricksha, rickshaw, rikishaとも表記される。さらにrickshaw-cycle, rickshaw-tricycleという表現も生まれた。

1869年 (明治2年)、西洋腰掛台に小車取付の一人乗り人力車が発明され、利用が許可された。1876年に東京府下の人力車台数は2万台を突破した。明治維新後に日本を訪れた英米人は大いに利用した乗り物に違いない。それだけではない。人力車は1874年頃からシンガポール、インドさらにヨーロッパにも輸出された。特に、東南アジアではjinkikishaではなくricksha(w)が普通である。2004年1月、シンガポールを旅行したらラッフルズホテルには当時のrickshawが置かれていた。また、市内を観光用にtrickshawという3輪の乗り物が走っていた。自転車の横に客をのせる座席がある。rickshawと同じように人力で動く。このトリキショーという語はtricycleとrickshawがくっついてできた語に違いない。お尻のshawが日本語の「車」にあたるわけで実に面白い。人力車が考案されてから130年経つが、こんな遠くの国でこんな形で今も生き延びているというのは感慨である。

jinrikishaと関連してkuruma, kuruma-yaという日本語も英語に借用された。ここでいう「くるま」とはもちろん「人力車」のことである。美空ひばりの歌に「ちょいとお待ちよ車屋さん。お前見込んで頼みがござんす」という歌詞がある。今の若い人にはほとんどわからないと思うが、車屋とは人力車夫のことである。人力車を引く者を、車屋といたり、車夫といたり、車引きといたりする。これは英語も同じでjinrikisha-man (1882), jin-ricsha coolie (1888), jin-rikisha coolie, jin-rikisha runner (1889), jinrikisha coolie

(1891), jinrikisha-puller (1905), jinriksha boy (1907), jinrikisha pullers (1913), jinriki-man, jinrikishafu (1920), kurumaya, kuruma-runner (1880), Kuruma-man (1891) などいろいろな表現や綴りがある。

人力車が利用された以前の乗り物とは何であろう。駕籠である。英語でnorimonoと言えば駕籠のことである。ただし、kagoという語も借用されnorimonotoと区別して用いられた。現代の日本人は「乗り物」と「駕籠」を包摂関係にあると考えているが、江戸時代に日本を訪れた外国人はnorimonoとkagoを並立関係にあると理解していた。



このため、この区別は英語文献にも時々でてくる。大衆の常用した竹組みの粗製のものをkagoと呼ぶ。これに対して、木製で漆を塗り金物つきの引き戸がついている特製のものがnorimonoである。公家や大名や上級武士など高位のものが常用した。駕籠は庶民の足であった。最も一般的なもの、町駕籠、辻駕籠などと呼ばれた。17世紀中頃には、町人が駕籠にのることを贅沢だとして規制を加えた。しかし、町人が経済力をつけるに従って幕府の制限令も次第に有名無実となった。

3. 商品名 (ウォークマン, ニンテンドー, ゴジラ)

日本の固有名詞が英語に入った例はいろいろある。地名や人名が圧倒的に多いが、それだけではない。Hirado (ware), Setomono; Hokke, Nichiren; Benten, Daikoku; Azuchi-Momoyama, Genroku; bandaite, johachidoliteなどがある。商品名や商標名もある。Toyota, Nissan, Sony, Hitachi, Canon, Suntoryなどである。

奇妙なことにOEDにはSuntoryが収録されている。この場合にはウイスキーのメーカーとしての商標名であるが、サントリーの後半は創始者「鳥井」の名をとっている。ビールの銘柄としては、日本人には「サントリー」よりも「麒麟」のほうが昔は人気があった。それにもかかわらず、OEDにはKirinは入っていない。では、英語文献に現れていないのかということ決してそうではない。All foreigners talk glibly of the dragon by its Japanese name

海を越えた日本語の履歴 (1)

of Kirin—they know it from the Kirin beer. (D. Sladen: *Queer Things about Japan*, 1904, p.362)

商品名などの固有名詞が普通名詞に変わってしまうことはよくある。日本で「ホッチキス」と言っているのはHotchkiss paper-fastenerの略である。ホッチキスはアメリカの19世紀中頃の発明家の名である。英語の普通名詞としてはstaplerという語を使わなければならない。日本語の「セロ(ハン)テープ」はアメリカ英語でScotch tapeという。ただし、この英語はマックス社の商標名である。同様に、日本語の「ティッシュペーパー」は1950年代から使われたようであるが、イギリスではtissueとアメリカではKleenexという。Kleenexは商標名である。

日本の商品名がそのまま英語に持ち込まれ定着している場合もある。Walkmanもその1つである。Walkmanはソニーが1979年7月に発売した。縦13.5cm, 横9cm, 厚さ3cmで今からすると小型とは言えない。定価も33,000円とけっこう高い。それにもかかわらず、その先進性ゆえにたちまち世界を席卷した。今ではWalkmanという語は一人歩きしている。この語を使った表現が無数にある。Sony Walkman, minidisc player Walkman, Walkman light, memory stick Walkman, digital Walkman, Walkman with soundなどであるが、正直言って機械音痴の私にはそれぞれがどんな物かよくわからない。

Nintendoもそうである。私が若い英語教師だった頃、アメリカの家庭にホームステイした時、すでにアメリカ人の子供は任天堂のゲームをしていた。お母さんは“My son is always playing Nintendo.”とぼやいていた。この語も英語として確実に定着した語である。日本語ではスーパー・ファミコンと知っているが、英語ではSuper Nintendoといわなければならない。任天堂が出資しているアメリカの野球チームがマリナーズである。シアトルが本拠地である。シアトルは私にとって思い出の多い町で一番好きな西部の都市である。私がいた1990年頃には、野球場はドーム式で羨ましいと思ったものである。そしたら、名古屋ドームができた。と思ったら本場ではドームは止めてしまった。確かに、ナイターは満天の空のもとが楽しい。

Godzillaは商品とはいえませんが、商標名として扱ってもよからう。この語はご存知のように日本映画の主人公の怪物である。1954年、東宝は戦後に生まれた子供が怪獣年齢にさしかかるのに合わせてこの作品を製作した。当時の平均的な映画製作費の3倍もかけたという。東宝はそれほど当たるとは予想せず、第1作でゴジラを死なせてしまった。これでは第2作ができないので、翌年ゴジラを復活させた。さらに、1962年にはゴジラとキングコングを戦わせた。このあたりまでが、我々世代が見ていたものである。小学生の私にも、見るからに人間が中に入っていますという代物だったが、楽しい映画だった。その後、50年にわたってゴジラは生き続ける。

そして、2003年4月、ゴジラはニューヨークに渡った。ゴジラ松井がアメリカの大リーグでプレイ（『外来語辞典』によると明治時代「プレー」は俗語で遊郭などへ行くことを意味した）している。うれしい限りである。ゴジラの方でアメリカ人ピッチャーを蹴散らかしてほしい。2004年のシーズンからはBig MatsuiだけでなくSmall Matsuiの活躍も期待したい。

4. 日本経済を支えた言葉（看板方式、改善、財界）

日本の経済を支えてきた概念がいくつか英語に入っている。現在、それらの語がどれくらい定着しているかを確認するためにBritish National Corpusを利用して検索した。このコーパスは1億語からなるが、私が利用したのはBNC Online ServiceのSimple Searchである。それでもおおよそのことはわかる。

kanbanは11例検索された。それらの例文をみるといくつかのキーワードにぶつかる。1つはsystemという語である。この語はthe kanban system, the kanban system of ordering components, a kanban system of inventory controlなどの表現にみられる。組み立て作業の流れに合わせ、必要な量だけ部品を供給し在庫コストの抑制を目指す方式である。そのシステムを円滑に機能させるために、看板と称する作業指図票を用いる。もちろん、今ならコンピューターを使ってやれる生産管理を30年前には看板を使ってやっていたということである。もう一つ注目すべきは“just in time”という用語やtight kanban schedulesという表現である。この方式では「ちょうど必要な時に」「必要なだけ」というのが重要である。カンバン方式の基本は在庫を最小限に抑えることだ。それにはかなり厳しい日程が要求される。このため、この方式では下請けの町工場は365日休む暇もなく働かされる可能性がある。トヨタの生産方式であるカンバン方式は1970年代半ばに確立したが今では世界的に有名である。この語が広く用いられるようになったのは1980年代以降であろう。

トヨタ方式については、名古屋で中学生だった私たちの耳にも入っていた。トヨタでは2-3センチになった鉛筆2つをボンドでくっつけて利用している。この精神が生産ラインにのるとカンバン方式となるのである。このkanbanという語はこれよりも数百年前に用いられている。オランダ貿易においてこの語が使われた。物を効率よく売るために看板が立てられた。

他にもトヨタ方式を表わす日本語が英語になっている。kaizenである。この語はコーパスには3例しかでてこない。こんな例文が出ている。“Japanese companies, recognised as being leaders in this field, have a special word for continuous improvement—

海を越えた日本語の履歴 (1)

‘kaizen.’” トヨタの改善は一度では終わらない。日々少しずつながら、決して止まることなく毎日行われる。

外国との経済活動が活発になると、その活動を表わす外国語がそれぞれの国に入ることにはよくある。日本では江戸時代にオランダ貿易が行われたが、そこで使われていた言葉にコンブラ(株)仲間というのがある。長崎出島のオランダ商館員や来航船の乗組員のために、日用品や輸入品などを日本商人とのあいだに立って取り次ぎ仲立ちをした特権商人をコンブラ仲間と呼んだ。出島ではこの言葉を当然のことながら、日本人も用いていた。しかし、この「コンブラ」という言葉はオランダ語ではない、ポルトガル語のComprador(「買い手」という意味)である。1666年、長崎奉行の認可によって成立した16株、16人の株仲間である。この語が使われているということは、オランダ貿易以前に日本とポルトガルとの交易の場ですでに利用されていたということである。

1970年代後半に日本語が英語に大量に流入することになった大きな契機は日本の経済発展である。日本経済の高度成長期にはkanbanやkaizen以外にもいくつかの語が英語に借用された。keiretsu, Nikkei, zaibatsu, zaitechなどの語である。

keiretsuは26例も検索された。ある例文はsix prominent keiretsuとして、三井、三菱、住友、富士銀行、三和銀行、第一勧業銀行に代表されるものを列挙している。2004年における経済状況では再編が進んでいる。これらの系列が19世紀におけるzaibatsuと強い繋がりがあっても指摘している。さらに、いくつかの例文は日本独自の企業系列の問題点にも言及している。これらの系列企業は排他的な面があり競争原理が働きにくいので、これがアメリカに入り込むのはよろしくないというのである。

zaibatsuをコーパスで検索すると29もの例が検索された。戦前の財閥を示すが、戦後は1つの企業連合あるいは複合企業を意味する。これらの例は戦前からの繋がりを指摘しているだけでなく、keiretsuと同様にその問題点も指摘している。

これらの経済用語は日本の経済力やトヨタの経済的効率を表わすために英語雑誌などで使われるようになった。しかし、バブル(こんな語は荒川先生の『外来語辞典』には収録されてない)の頃、日本の経済は一流と経済人も経済学者も威張っていたのに、バブルがはじけ、日本の政治と同じように3流に成り果てた。そして10年以上経ってもまだ日本経済は立ち直れない。その1つの理由はzaibatsuやkeiretsuという英語に象徴される日本経済の古い体質が未だに残っているからにちがいない。

5. ベッドとショック

日本語が英語に入る場合、そのままの形で入ることもあればいろいろ変形して入ること

もある。ここでは、英語に存在する語が日本語に借用され特別な意味合いを持ち、それが再度英語に持ち込まれる例をみてみたい。

すでに英語にある語句を日本の事物・制度などを表現するのに援用することがある。例えば、「基礎、土台、下絵」の意味で用いる ground(-)work を柔道においては「寝技」の意味で用いる。この意味が新たにこの英単語に付加される。ただし、2003年出版の *WC11* にはこの意味は掲載されていない。

chop は ‘cut something into pieces with a sharp tool such as a knife’ の意味である。この「チョップ」を日本人は特別な意味で使うようになった。ちょっと年の人なら誰でも知っている。戦後の日本人の心をつかみ、私たちを勇気づけた力道山のことを。力道山は「空手チョップ」で極悪非道なアメリカのレスラーをなぎ倒した。karate-chop の意味が加わり、アメリカで用いられるようになった。「空手チョップ」という語が使われるようになったのは1955年頃からである。あの頃の日本人はアメリカ人を今ほど崇めていなかった。ちょうどいいくらいに離れて見ていた。

OL は office lady の頭文字をとったものである。これは日本人が作った和製英語であるが、誕生したのは意外に遅い。『外来語辞典』にはないことからそのことがわかる。この OL をアメリカ人が使うことがある。それは日本の OL がきわめて差別的に待遇されていることを象徴的に示すためであったりするので注意しなければならない。

もっと奇妙な例がある。bed が日本に入って「ベッド」となる。それが英語に beddo という形で里帰りする。beddo を収録した新語辞典 (*A Dictionary of New English 1963-1972*) の定義はこうなっている。‘any of various beds designed in Japan that may be raised, rotated, rocked, etc., by electronic means’ これは日本でいう「回転ベッド」のように特別な意味合いで用いられることを示す。この意味を担った beddo が英語に里帰りしたというのである。現在ではほとんど用いられていないようである。

日本語の「ショック」はかなり前から使われている。『外来語辞典』には1889年(明治22年)刊行の石橋思案『乙女心』の例がでている。「電報の声は激しいショックを与えました」というように、平成を生きる我々と同じような使い方をしている。beddo に比べると、shokku は英米人によって時々用いられる。Nixon shokku, oil shokku などがその例である。1971年8月15日は日曜日だった。その日、アメリカ大統領ニクソンは金とドルとの交換停止を宣言した。翌日の東京市場は取引を停止し大混乱となった。これがニクソンショックと呼ばれるものである。オイルショックのことは皆さんもよくご存知だ。1973年10月6日第4次中東戦争が勃発した。中東地区からの油にほぼ全面的に依存していた日本経済は危機的状況に追い込まれた。ガソリンの値段がたしか80円くらいから130円くらいまでショッキングなほど跳ね上がった。その頃、私は中古車(日産のチェリーというスポーツ

カー) を初めて自分の給料で買って東三河の山のなかを乗り回していた。車は買ったが、ガソリンがない。10リッターとかそんな単位でしか売ってくれなかった。考えてみると、あの頃のガソリンの値段は桁外れに高かったと思う。

beddoもshokkuもわざわざそんな綴りの語を使うのは、日本人を揶揄したり皮肉ったりするためである。だから、nikuson shokkuとかbusshu shokkuと表記するほうが彼らにとっては表現上の効果があるのかもしれない。

6. 英語で柿の品種をご存知ですか

柿の学名はDiospyros kakiである。Diosは「神の」で、pyrosは「果実」である。古い英語文献ではkaki figという形で出てくることが多い。kakiという日本語が英語に借用されているくらいなら驚くことではない。柿は19世紀に中国からヨーロッパへ入った。アメリカへは日本から19世紀の半ばに入ったといわれている。この柿の品種名が英語辞書に現れるから驚きである。

富有柿なら誰でも知っている。この品種は岐阜県本巣郡巣南町が原産である。慶応元年(1865)、この地に生まれた福島才治は柿の展覧会に出品するに際して「素質のよいものは自然に全国に広まる天の助けがある」という意味の「富有」をとって「富有柿」と命名した。その結果、一等をとって全国に広まった。富有柿は日本では有名だが、この語は英語に入っていない。英語に借用された柿の品種はHachiya, Hyakume, Kurokuma, Yeddoichiなどである。

岐阜県はHachiyaの柿でも有名である。先日ドライブがてら美濃加茂市にある昭和村を妻と訪れた。その道中に蜂屋町をみつけた。その地名を採って蜂屋柿と呼ばれている。かなり大振りの渋柿で、干し柿として珍重されている。噛めば噛むほど甘みが柔らかくしみ出てくる。ただし、干し柿だからといって安いわけではない。買うとなると富有柿よりも高い。それもそのはず、昔から「干柿一個に米一升」といわれ米の代わりに年貢として納められたという。この蜂屋柿を使って柿羊羹が岐阜県の大垣で作られている。逸話が残っている。関が原の合戦で、徳川家康は揖斐川まで進軍して来た。それを迎え地元農民が大きな柿を献上したところ、家康は「われ戦わずして大柿(大垣)を得たり」と喜んだという。

日本の柿の品種は1000種以上あると言われている。これは他の果樹に比べてもかなり多い数である。甘柿と渋柿に分かれ、それぞれいろいろな品種があるが、一般の人に知られているのは富有柿や次郎柿くらいかもしれない。英語に入った品種名を見てみよう。

蜂屋 上で述べた渋柿の長形で滋賀・広島などでも採れる。

- 百目 甘柿の円形で京都・広島・岐阜で採れる。これには扁形もあり石川で栽培される。
黒熊 甘柿の円形で埼玉や神奈川で採れる。
江戸一 甘柿の一種で静岡などで栽培される。

柿の品種名には他にも「イヌコロシ」「クモノス柿」「生霊」など変わった名前があつて楽しい。人の好みは自由だが、余り無闇に適当な柿の品種名を英語辞書に収録しないほうがよい。

私は柿が好きだが、少し固めのものがよい。私の母はむしろ熟れ過ぎたような柔らかいのが好きだ。昔から「柿の季節は医者いらず」「柿が赤くなると医者が青くなる」というくらいであるから、身体によいはずだ。カテキンや複合タンニンが血圧を下げるという。それもあつてか昔ながらの日本の家には1, 2本は柿の木が植えられていた。英語にはAn apple a day keeps the doctor away. という諺がある。イギリスでは家の庭にリンゴの木を植えることもあるようだ。私が留学中にお世話になったハートマン博士の庭にも1本だけリンゴの木があつた。kakiもappleも身体によいのだ。

7. 日本人とお茶

ご存知のようにteaという語は中国語から英語に入った。しかし、最近、英語にchaという日本語が借用され根づこうとしている。アメリカでペットボトル入りの日本茶を精力的に売り込んでいる会社がある。この例のように、同じ語彙で中国語から英語に直接入ったものと日本語を通じて英語に入ったものがある場合、それを同源借用 (cognate loans) という。

最近インターネットを通して世界中のお茶が購入できる。逆に、世界のどの国にいても日本のお茶を手にいれることができる。あるインターネットのサイトを紹介しよう。teaとchaが混在している。

- | | |
|-------|--|
| ウーロン茶 | Oolong tea [Chinese tea] |
| 紅茶 | Black tea [English tea] |
| 昆布茶 | Tea of salty kelp powder [Kombu-cha] |
| 麦茶 | Tea of parched powder of barley with husk [Mugi-cha] |
| 緑茶 | Japanese green tea |

o-chaのサイトは他にもある。そこではいろいろな日本茶が紹介されている。‘Koi-cha

(Thick tea) is sweeter, more milder tasting than Usu-cha.’ ‘Sencha literally means roasted tea.’ ‘Sencha grades are identified by color.’ ‘Bancha—the most common green tea in Japan. It is considered to be a somewhat lower grade of sencha—yet it has its own unique taste.’ ‘Bancha tea is a Japanese green tea. Kukicha and Bancha tea are the same tea.’ 「濃い茶」「薄茶」「煎茶」「番茶」などが紹介され売られている。ケンペルが『日本誌』(1727)のなかで日本茶の飲み方について詳しく述べているのは有名である。このように英語には多くの日本茶に関連した語が借用されてきた。

多種多様なお茶があつて人生が豊かになる。私はイギリス留学以前は日常的に緑茶を飲んでしたが、留学後はイギリスかぶれで紅茶党になってしまった。このため、紅茶の缶がどんとたまって、それを集めるのが私の趣味の1つである。私の研究室の棚の2段はそれらの缶が鎮座している。

最近健康ブームでお茶が見直されたこともあつて、1年中多種多様なお茶を楽しんでいる。緑茶、番茶、麦茶、紅茶だけでなく、抹茶、豆茶、タンポポ茶、ハーブティー、ドクダミ茶、プーアール茶、ジャスミンティーなどなど。最近知ったのは、ケニアの女性が痩せるために飲んでいるジュアール茶。お茶が世界を巡って、その製法の違いで名称が異なるように、言葉も世界を巡る。

言葉の話しに戻ろう。tea, chaについてと同じことは次の例でもいえる。typhoonは直接中国語から英語に入ったのに対して、taifuは中国語から日本語を経て英語に借用された。typhoonという語を用いずあえてtaifuという語を使っているような例がある。もちろん、後者は一般的に用いられているわけではない。

多少意味合いは異なるが、Japanは中国語からスペイン語などを経て英語に入ったのに対して、Nifon, Niphon, Nipponは日本語から英語に入った。この語の発音について、明治のころ日本にきた英米人は「ニホン」のほうが品がよいと書いている。これは日本人がそう思っていることの反映に過ぎないと思われる。Japanにはいろいろな派生語がある。Jap, Japanese, Japaneseness (日本人特性), Japanesery (日本の装飾品, 骨董品), Japanesey (日本風の, 日本式の), Japanesy (日本風の, 日本式の), Japanesque (日本式の, 日本風の, 日本様式), Japanesquely (日本風に), Japanesquery (日本趣味), Japanicize (日本(人)風にする, なる), Japanism (日本心酔, 日本(人)風), Japanization (日本(風)化), Japanize (日本(人)風にする, なる), Japannish (日本風の), Japanology (日本研究, 日本学), Japanologist (日本研究家, 日本通), Japanophile (親日家(の)), Japanophobia (排日主義), Japlish (日本語的英語)である。さすがNipponはJapanにはかなわないが、こちらにも派生語がある。Nip, Nipponese, Nipponian, Nipponism, Nipponium, Nipponizeである。

これらの中でJapとNipについて述べたい。Japanese（日本人）を略した語がJapである。これは日本人を馬鹿にするときに使われる語である。ただし、私の調査によると初出年は1874年であるが、明治の末くらいまでの文献ではそのような差別的意味合いはないように思われる。単なる短縮形として、時には愛情さえもってこの語を使っている。“But when the Japs, especially the ladies, came to explore the kitchen, their admiration for the cooking-range and chimney was unbounded.” (E. W. Clark: *Life and Adventure in Japan*, 1878, p.60) これがいつの間にか特殊な意味を担うようになってしまった。これに対してNipの初出年は1942年である。第2次世界大戦中である。このことからわかるように、この語は当初から差別的な意味合いで用いられた。私の調査した文献のなかではK. K. Kawakami: *The Real Japanese Question* (1921) とC. McWilliams: *Prejudice, Japanese-Americans: Symbol of Racial Intolerance* (1944) が日系アメリカ人に対する差別語や表現を取り扱ったものとして印象に残っている。

8. 禅に関する語彙

幕末から明治にかけて多くの外国人が禅に興味を示した。その一人がフェノロサ (Earnest F. Fenollosa) である。彼は1878年 (明治11年) に来日し、東京帝国大学で哲学・経済を講ずるうちに日本美術に関心をもつようになった。狩野芳崖や橋本雅邦を助け日本画の復興に寄与した。彼は*Epochs of Chinese and Japanese Art* (1912) において、日本美術史との関連で禅の問題を取り扱った。その著作にはZenが名詞の前で限定的に用いられる例がいっぱい出てくる。Zen academies, Zen apostles, Zen Buddhism, Zen Buddhist, Zen contemplation, Zen dispersion, Zen doctrine, Zen educational policy, Zen enlightenment, Zen episcopates of Kioto, Zen germ, Zen idealism, Zen ideal of a bird, Zen influence, Zen landscape, Zen monasteries, Zen movement, Zen origin, Zen perception, Zen portraits, Zen predilection, Zen priests, Zen problem, Zen propaganda, Zen pupils, Zen religion, Zen scheme, Zen seer, Zen service, Zen spirit, Zen symbolism, Zen system, Zen teachers, Zen temples, Zen thinker, Zen thoughtなど。これを見ただけでも、禅と日本美術との係わりの深さとその解明にかけたフェノロサの情熱が感じられる。

英米世界に禅の精神や哲学が初めて紹介されたのは1930年代であろう。鈴木大拙がその先駆的役割を果たした。彼は英語の著作を何冊か江湖に送った。*Essays in Zen Buddhism* (1927), *An Introduction to Zen Buddhism* (1934), *Buddhist Philosophy and its Effects on the Life and Thought of the Japanese People* (1936) などである。その後、いわゆる

海を越えた日本語の履歴 (1)

禅ブームが起こった。それを契機にいくつかの禅用語が英語に入った。zazenやzendo (禅堂) くらいなら誰でも見当がつく。

禅の本格的なブームは1960年以降だと思われる。仏教のなかで禅宗だけが西洋の人々に特に訴えるものがあるのは、やはりzendoでのzazenを通しての黙想や瞑想の姿勢にあるのであろう。ベトナム戦争から帰還したアメリカ兵士のなかには、zazenによって戦争中に植え付けられたトラウマを乗り越えようと考えた者もいたにちがいない。

他に次のような禅用語が英語に入った。

- mondo (禅問答) 弟子が質問し、それに師が答えること。これは門弟教育の重要な手段だと考えられている。
- dokusan (独参) 座禅修行の際に、参禅者が一対一で老師と相対し、与えられた公案について自分自身の所見を述べること。
- Roshi (老師) 禅宗における年とった高僧を指すが、日本語でも英語でも具体的な名前とともに用いるのが一般的である。洪川老師、水野虎溪老師のように、英語でもUchiyama Kosho Roshi, Roshi Philip Kapleauと用いる。

satoriをWC11ではこう定義している。“sudden enlightenment and a state of consciousness attained by intuitive illumination representing the spiritual goal of Zen Buddhism” 当然のことながら、わかりにくい。アメリカのインターネット上のある禅のサイトをみると面白い。禅僧の顔が画面いっぱいに出てくる。動画になっていて、そこにハエが飛んでくる。禅僧の頭の上ののつたと思うと次は鼻のなかに入りそして耳から出てくる。禅僧は意に介さない顔である。これがsatoriであろう。

wabi (侘び), sabi (寂び) も英米では禅仏教との関連においてとらえられている。鈴木大拙が*Essays in Zen* (1934) において “This spirit of ‘Eternal Loneliness’ . . .” と紹介したことによるのであろう。これに対して、日本では「侘び、寂び」は茶道や俳諧での極致として求められる美意識と解されることが多い。

koanという日本語も英語に借用されている。一般の日本人はkoanからどんな日本語を思い浮かべるのであろう。「公安委員会」の「公安」を想像する人も多いだろう。まったく違う。禅語の公案である。「祖師の言行や機縁を選んで、天下の修行者の規範としたもので、全身心をあげて究明すべき問題のことである。修行の正邪を鑑別する規準でもある。」このように説明しても、禅に関心のない人々にはよくわからない。OEDの説明を日本語に直すと「修行僧の精神を活性化させるために与えられる逆説」となる。

koanの初出例はベネディクトの『菊と刀』(Ruth Benedict: *The Chrysanthemum and*

the Sword 1946) である。この本は戦後すぐ昭和23年に長谷川松次によって日本語に翻訳された。その翻訳書に「公案」についての箇所がある。「弟子に必死になつて「悟り」を開かうと努力させるために最も愛用された方法は「コーアン」〔公案〕であつた。…公案は合理的解答を得ることを目的としたものではない。…公案の意義はこれらの真理探究者が発見する真理にあるのではない。それらの真理は全世界至る所の神秘主義者の発見する真理と何ら選ぶ所がない。公案の意義はそれが、日本人が真理の探究といふことをどんな風に考へてゐるか、といふことを示す点にある。」(pp. 341-344) この公案に対する態度に象徴されるように、ベネディクトは禅やその唱導者である鈴木大拙を激しく批判した。

ベネディクトは「文化相対論」を錦の美旗にしてはいるものの、彼女のなかに日本を理解しようという態度はない。この研究を引き受けたきっかけについて彼女自身こう語っている。「私は1944年6月に日本研究の仕事を委嘱された。…従つて1944年6月に、吾々の敵日本に関する、数多くの疑問に答へることが肝要であつた。問題が軍事上の問題であろうと外交上の問題であろうと…」(pp. 4-5) このような態度に対して、C. ダグラス・ラミスは1981年にこう述べている。「ベネディクトの教えるところによれば、日本人がいつそうアメリカ人らしくなることは自然で健康的な成長過程であるが、これにたいしてアメリカ人が日本社会に適合しようとするのは、自然の法則に反し、みずから悲惨な奇形の姿をさらすことになるにちがいないのであつた。」(『内なる外国』p. 92)

参考文献

- 荒川惣兵衛 (1967) 『角川 外来語辞典』 角川書店.
- Barnhart, C. L., Sol Steinmetz and R. K. Barnhart (1973) *A Dictionary of New English 1963-1972*. London: Longman.
- ベネディクト, ルース (1948) 『菊と刀 日本文化の型』 長谷川松治訳, 社会思想研究会出版部.
- 早川 勇 (2003a) 「英語に入った日本語語彙の初出年調査」 『日本語科学』 13号, pp. 79-108.
- 早川 勇 (2003b) 『英語のなかの日本語語彙—英語と日本文化との出会い—』 辞游社.
- ラミス, C. ダグラス (1981) 『内なる外国—『菊と刀』再考』 加地永都子訳, 時事通信社.
- 松村明編 (1995) 『大辞林』 第二版, 三省堂.
- Mish, Frederick C. ed. (2003) *Merriam-Webster's Collegiate Dictionary*. Eleventh edition. Springfield, Mass.: Merriam-Webster.
- Simpson, J. A. and E. S. C. Weiner ed. (1989) *The Oxford English Dictionary on Historical Principles*. The second edition. Oxford: Oxford University Press.
- 竹林滋編集主幹 (2002) 『新英和大辞典』 第6版, 研究社.